



六根清淨大稜圖會

上

特別
イ 4
3163
172(1)

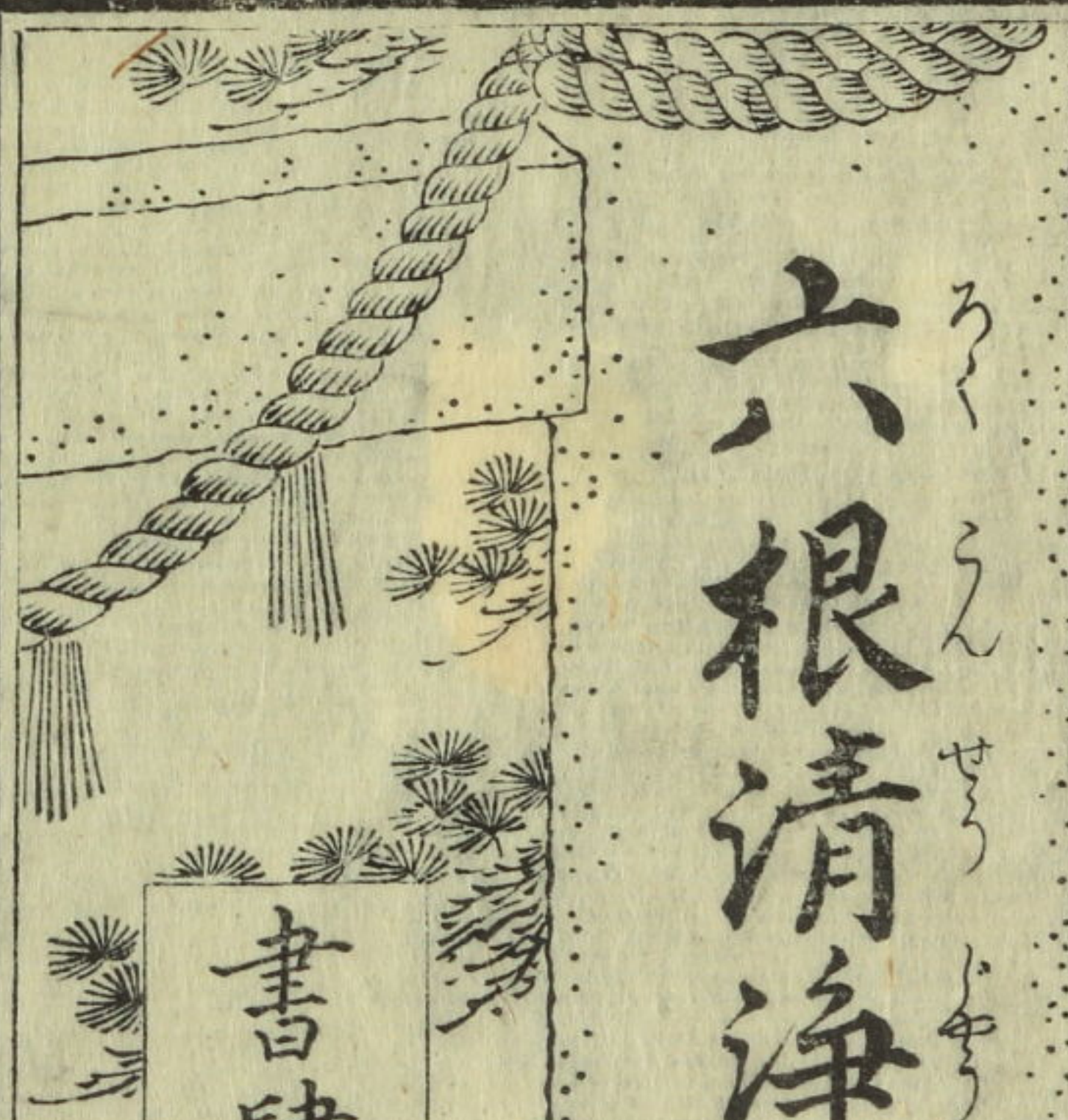
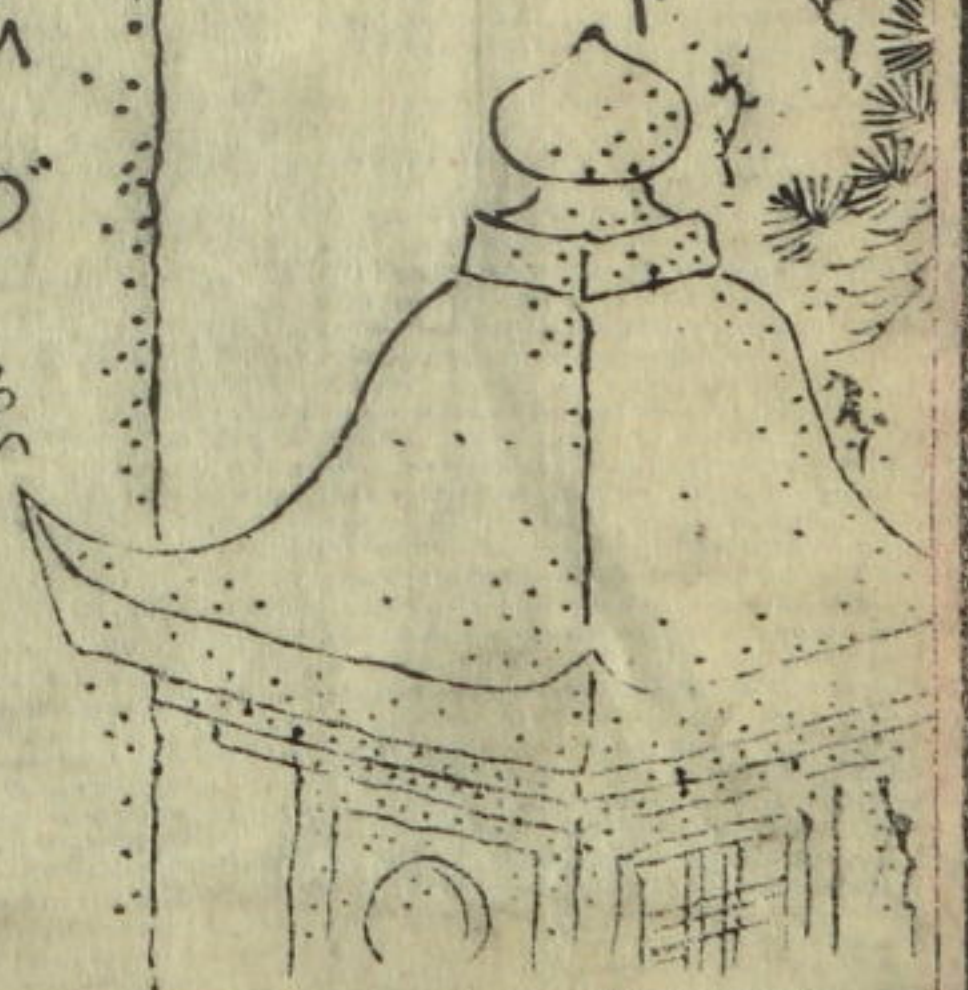


編述 蓬室有常
画工 松川半山

六根清浄大被圖會

書肆

三書合梓



六根清浄大被圖會自序

燒鐘於殿前。祖父山、柴可、小月、母、川、洗濯、小申、ハ

小戸の身源、な、ひ、な、ん、か、昔、徳、由、心、を、お、れ、初、ま、り、後、あ、ま、り、見

夫、過、を、と、い、悲、之、の、三、行、後、や、く、亦、之、に、湯、を、登、す、村、人、あ、は

笑、ひ、を、生、じ、是、は、も、ひ、也、笑、ひ、を、同、訓、く、れ、ハ、ハ、る、多、れ、神、等、も、亦

と、申、田、女、が、舞、を、お、ま、り、あ、ハ、神、の、船、を、を、お、給、也、又、神、楽、が、れ、あ

の、約、り、て、之、れ、顯、す、其、名、義、を、也、抑、遠、小、本、心、の、神、明、ハ、動、も、す、ま、ば

人、欲、の、若、く、不、強、れ、と、常、固、小、住、見、と、以、男、い、余、亦、小、中、在、故、後、を

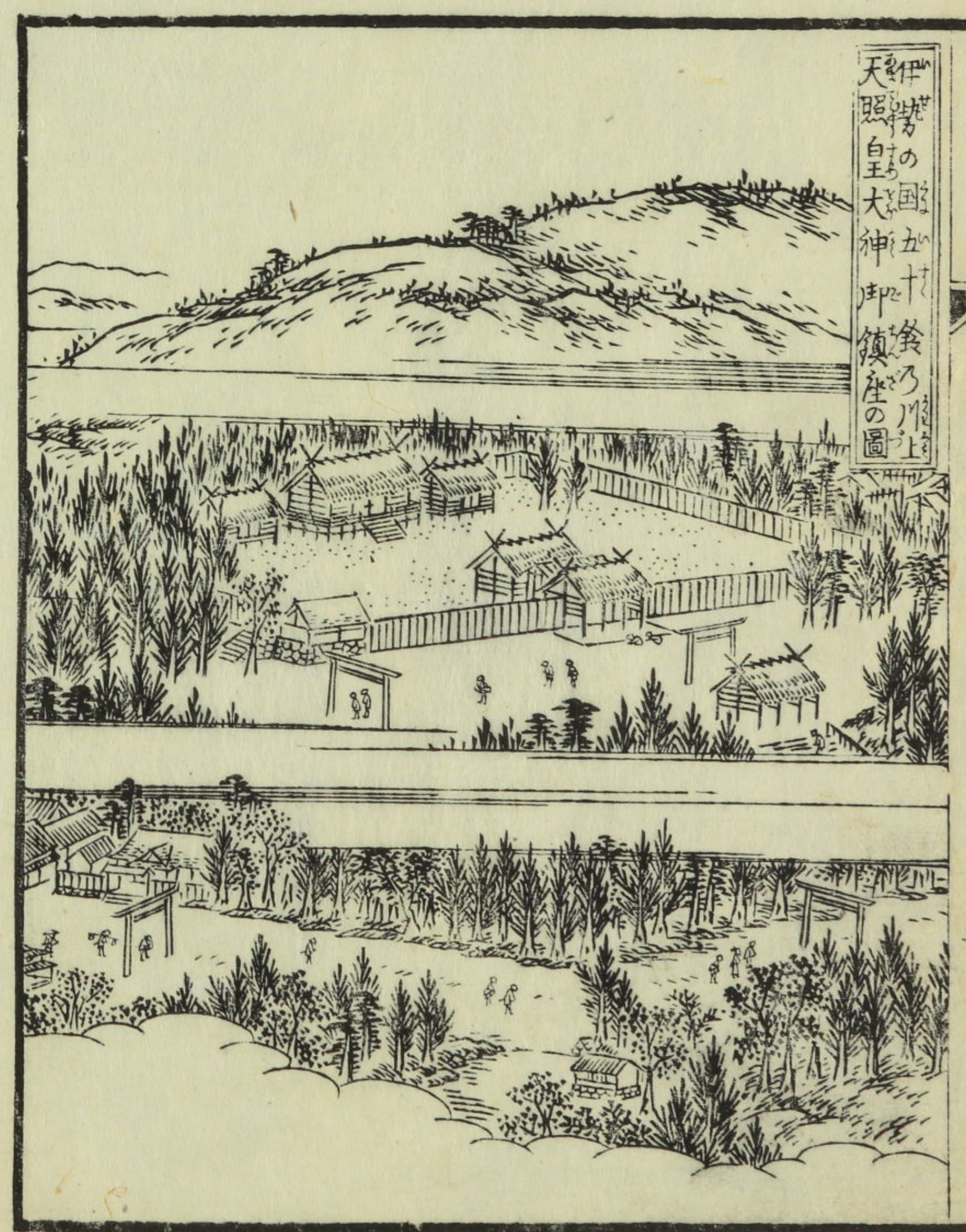
注、解、と、画、師、も、こ、し、を、畫、し、神、楽、を、奏、せ、し、か、を、見、童、の、お、ま

り、あ、り、画、師、と、て、笑、を、催、し、若、く、お、り、の、祝、詞、を、同、言、て、真、ト、な、れ、ば

伊弉諾
 伊弉册の
 柳葉子
 こゝろのしや
 かはあ日と
 やまこ



伊弉諾の國
 伊弉册の鎮座の圖
 天照皇大神



附言

外書ハ... 八部ノ後... 此後ノ國令... 是後ノ解...

遠室主人再誌



六根清浄太極圖會卷之上

撰都 蓬室有常 編述



六根清浄太極

掛毛... 天津見屋根... 假と... 小見へ... あり... 加へて...

六根清浄太極

口

思ふて吾國と此は云く天竺と月の國との漢土と宇のふと其の如く又天竺と
 苑來との唐且とは兼らひ日本と根本とすとも宜らり又天竺天皇の
 勅後にも西方の佛法と尤の如く佛道と右の如くは天竺と天竺天神
 の如命の如く吾子孫の君と此國と三種十種の神靈を傳ふる人
 なる神を尊もつる其は佛くまを以て神姓と解教ふ及やせむん
 六根との眼耳鼻舌身意の六ぞん根の別心之生いとは彼は
 所由の者心より故六根と謂や又性根と云ふこと云んは福と信む
 と所要あり候も穢る穢る枝葉の如くやうにすがりて人の如く
 候へども人の如く候れば根とすれば言葉の如く候とて
 とも六根の名目の佛經に如る六塵六識等合せては云ふに天界と名る

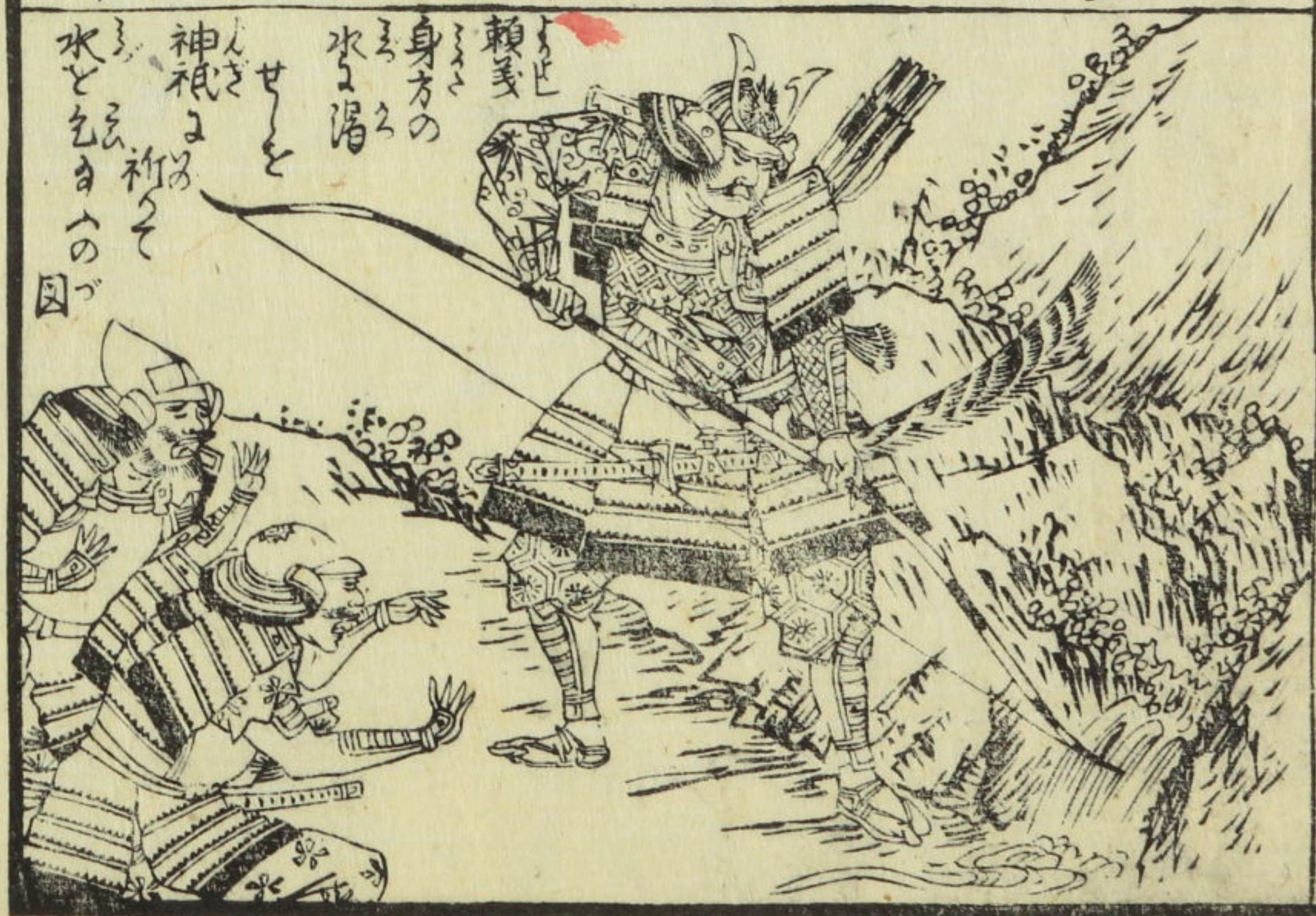
此後除の仏語と候て神道と云ふこと其の程初著せらるるは題号を用ひし
 六根の強きの本文の間の條に垂く候事なり○清淨の二字はきよ
 けりと刻り穢る穢るといふ字の同馬遷が史記に如る佛經の漢譯の
 明帝の時も中も海より故に佛經の字に於て神代卷にも素戔嗚尊の
 吾心清く之は言卷も又日の神素戔嗚尊と共にお對ひて曰若汝心明淨
 ての如あり專ら神道と執して云はれ強ち吾等の文字に抱り候事なる事
 聖基本紀曰各々念神と云ふは清淨とて先づ其法とて宗と候と云ふ
 清淨の語を用ひしは神書に如る事なり○大後といふは後の佛道
 賢者への神を後除といふ義釋は曰後石神と釋淨すの義なり
 余竊は後除の起るを考ふる欽明天皇御治世の十三年乙未の國の王より

況や人の心は物色も智を靈妙の本心より上下の隔はなま憂ねる神と
 志れば亦ともなほ深きすべし又今日止る刻は日天の海を固てせらるる神
 ては日と昔との教へて是を正さるる日なりまればは日と昔との神高きと
 一をより外より一をよむと昔を以神止るといふ事には神をよむと昔をよむ
 又
 云々云々此の事なり一止るはいつては凡そ申すに言ひ日と昔との神と
 本とするをまう又神と昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 包ま移りむとて是を以神と二つる神の謂へて神を合とて人といふ事と昔をよむ
 人々をよむと神の申す人々をよむ人々をよむ人々をよむ人々をよむ
 夫人の爲物の靈をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 今い実智の信りたるは物の果は凡智の果と昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ



傲まらぬ不却てを智れば亦身と昔と或は神と昔をよむと昔をよむ
 故に神は若く昔何乃時世との事なり神と昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 試は七回の玉環と申す通ることを神と昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 けふは凡人をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 腰に帯を密と以て環の如くは余り帯と入候その帯の音と聞くと昔をよむ
 通へ入て出ると昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 還りて凡人をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 中將進ぐ大匠の故は亦死と昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 後と昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむと昔をよむ
 昔は是様通一の明神の序なり是は紀の書より人々をよむと昔をよむと昔をよむ

神心は叶ふ干満の二心するはあめぞれ
 心をさす 一人あん
 念地をばして心様をばがごとくする
 ひねるはあはれるも入ねがー
 こま てるみ
 こ後のねよの徳のたま
 ねの通う古事もまじてくまのねよ
 た ぶちう かる
 まつふあふふまがくと石清はねい
 ろと ともひ
 めど汚泥よふんこととけむむてし
 白衆等各念比給陪
 けい けい
 ひより下の文余留とらあふらまで再上の
 せん せん せん
 律宣とあつね知るう○白衆とあふ



天の巻巻人を物ていふなり○各念比給陪と威奔具起の美といふなり
 白衆等云の徳の或本よは又やうていなるべし文の上の神宣は對すれを
 白衆ハ天の神おの○各念ひ給とら種々の事なむとあまをいふなり
 此時仁清久潔幾偈阿利
 此の時仁清久潔幾偈阿利
 此の時仁清久潔幾偈阿利

六根の喜怒哀樂愛悪欲の七情の動根かまてるの迷ひのふれぬら
 めれ其あよ心神といふき共で六根石海とらう身と極ひ家と破るあといふる
 六根こびく法海をば喜怒哀樂ホの七情の法海をう極て法海をさす
 案して神とこと二つせらるるを知らしむる法海をば人といひん法海をさす

